

偏差値やブランドが選択の基準か 当時の憧れは物理の湯川秀樹さん 人生で自信になっている気がする



一步先のあなたへ

永田 和宏

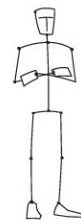
5 先生で大学を択ぶ

本紙日曜日の紙面には、「天眼」という欄があり、幾人かの先生が交代で文章を書いておられる。ちょうど1年ほど前だったか、歴史学者の上田正昭さんが、どのように大学を決めたかという話を書いておられて、強く印象に残った。上田さんは、大学を決めるとき、折口信夫の講義を受けたかったのだという。そのため折口が教授として講義をしていた國學院大學を受験し、専門部の学生となった。

折口信夫は民俗学者にして国文学者。その研究は「折口学」などと呼ばれたりもする。

上田さんは、三年間折口の講義をしっかりと吸収してから、次に西田直二郎の門をたいた。京都帝国大学へ入りなおしたのである。ちょっとミラー的に言わせてもらえば、なんてカッコ

コいいと思ったことだった。行こうと思えば京大にも十分行けるのに、折口信夫という心に決めた先生がいたから、まず國學院大學へ行った。もちろん國學院はいい大学だが、選択基準が偏差値やブランドとしての大学名しかないような頭からは、出てこない発想かもしれない。私は上田さんのこの話に、どの大学を択ぶかと考えるときの原点があると思っ、いたく感心して読んだのであった。



いまだときの高校生が大学を択ぶときの最大のポイントは、偏差値ということにならざるを得ないだろう。この大学なら、自分の能力で入れそうだが、ここは無理だろう、とまずは偏差値で選別する。親も教師も、そして受験生自身も、その大学にはどんな先生がいて、どんな講義が行われているのかを本気で調べている様子はあまり感じられない。それは現行の受験制度のもとではやむを得ないことではある。しかし。

大学での教育は、次のステップへの道具でも手段でもない。大学で学ぶということは、そこで学ぶという、そのこと自体が目的なのだとは私に考えている。最後の教育の場なのである。で、あってみれば、そこにどんな先生がいるかくらいはあらかじめ調べておかなければ、あまりにもったいないと思わないだろうか。

私は高校生の時、物理という学問に強くあこがれた。古典力学に魅せられたと言ったほうがいいのかもされない。初期状態と運動方程式さえあれば、ほぼす

べての公式が導き出せてしまう美しさ。やるべきは物理しかない。と幼くも思ったものである。

そのとき京都大学理学部に湯川秀樹先生がおられた。もちろん日本初のノーベル賞受賞者として知らないものはない。それだけで十分であり、他の大学の併願などは考えることもなかった。落ちれば次の年受け直す。

運よく入ったとはいいが、いろんな事情から、すぐに物理に落ちこぼれてしまった。だから大きなことは言えないのだが、それでもその選択は私の人生のなかで珍しくいい選択であったと思っのである。ギリギリのところまで湯川先生の講義に間にあった。

講義の内容がいま何かの役に立っているかと問われれば、はつきり「無い」と言っほかないだろうし、ほとんど忘れてしまったが、物理に憧れ、湯川さんに憧れて大学を択んだということは、そしてその講義を理解のほどはともかく一年間受けたということとは、どこかで私の自信になっているような気がするの



大学を択ぶとき、この大学にはこの先生が居られるからと、そのへんで選ぶことができれば、それは素晴らしいことだと私は思っ。

わが学部の新入生を前に、君たちはどうしてこの大学、この学部を択んだの?と聞いてみる。一人くらい、永田先生がいるからと答えてくれないかと淡い幻想を抱いたりもするのだが、もちろんそんな答えを返してくれない学生はひとりもない。



針路

京都産業大教授(細胞生物学)、歌人